

『声、意味ではなく―わたしの翻訳論』

和田忠彦著

平凡社 二〇〇四年

ぼくは翻訳を好まない。翻訳の文章を読まないというのではない。そんなことはできない。そうではなく、自分で翻訳するのが好きではないのだ。これは中学、高校、大学を通じて、日本で受けた外国語の教育がひとつの例外（大学院で受けた蓮實重彦先生の「一八五〇年代における文学的変容」にかんする授業）を除いて、明けても暮れても訳読であったことと関係していると思う。

大学でフランス語に立ち向かったとき、ぼくにはひとつの決意があった。それは、森有正における〈経験〉の概念に触発されてのことだったのだけれども、それまで強いられてきた英語学習法と訣別して、フランス語をまずなによりも音として、響きとして自分のなかに取り込むということだった。気の遠くなるような長い時間がかかるにせよ、言葉を音による〈経験〉として沈殿させなければ何事も始まらないと思っていたのである。だから、ぼくの注意はフランス語の言葉を聴くことに向かった。音として提供されている教材にひたすら耳を傾け、文字としてしか存在していなかった言葉はかたつぱしから音にした。そうすることで、フランス語に染め上げられた言語意識を手に入れ、フランス語の世界の住人になろうとして

いたのである。これは勉強というよりは修行、あるいは訓練で、ピアノやヴァイオリンの巨匠といわれる人たちでさえも日々の音階練習を欠かさないのと同じで、結局は一生続くものだろうと思っているのだけれども、そのおかげなのか、ぼくは、ある時期から、自分の専門的な仕事の対象になったフランス語表現の文学テキストを前にすると、それがまるで楽譜であるかのように、音として立ち上ってくるということを意識するようになった。

〈読む〉とは、結局、テキストに固有の〈声〉を聴く経験なのだということをしみじみと感じているべくにとつて、和田忠彦さんの『声、意味ではなく―わたしの翻訳論』のページをめぐることは、親しい友人に再会したときの歓びに似ていた。テキストが一種の楽譜であるならば、それを〈読む〉ことはいわば演奏 *interpretation* であり、演奏とは即解釈 *interpretation* にほかならない。ところが、テキストを解釈するということは、そのテキストを別の言語に移動・変換することでもあるから、解釈とはつまるところひとつの〈翻訳〉 *interpretation* = *traduction* なのである。

* * *

『声、意味ではなく―わたしの翻訳論』にはいくつも仕掛けがほどこされている。めまいをもよおさせるほど多様なテキストをめぐる二〇の短いエッセイが独立しつつ、しかし数珠のように一本の糸によって、ときにはしりとり遊び（という人がいる）を連想させるようにつながっているということ、そしてそれを両端から挟みこむ

ように、「読むこと、訳すこと」、「声をさがしつづけて」と題された翻訳という営みそれ自体にかんする少しばかり理論的な文章が配されているという構成の妙もそのうちのひとつに違いない。このような堅固な構造と一見それとは反対の自由を見事に両立させている

仕掛けを、ぼくは一種の変奏曲のように読んだ。この本は音楽への参照が多いとはいえないけれども、実は本質的に音楽的な構成を取っているようにみえる。和田さんがそのことに意識的なのかどうか、ぼくにはわからない。しかし、二二の文章のつらなりを、ぼくはたしかに翻訳をめぐる主題と変奏として受け取ったのである。冒頭の翻訳理論の回顧的な考察の最後にぼつんともたらされる欠如感が呼び水となって、そのあとに続く二〇の変奏が導き入れられている。変奏曲というと、バッハの『ゴールドベルク変奏曲』、ベートーヴェンの『デアベリの主題による変奏曲』、ブラームスの『ハイドンの主題による変奏曲』などが思い出されるけれども、いずれの場合も、作曲家は主題に強い魅力を感じると同時にある種の欠如感を抱いているのではないか。そうでなければ、どうしてひとつの主題を引き受け、その同一性を維持しながらもそれに延々と変形を加えるなどという作業に身を「裏せる」だろうか。主題の魅力と、しかしそこに同時に認められる欠如をなんとか埋めたいという欲望とのせめぎあいに変奏曲を成り立たせているとすれば、『声、意味ではなく―わたしの翻訳論』の初巻にはたしかにそういうせめぎあいの痕跡が認められる。音楽における変奏曲の傑作がそうであるように、主題がその同一性を頑固に維持しながらも、当初の欠如を埋めるために微妙な差異の連鎖を抱え込むことによって無限に変容してゆく姿は、

精神の限らない可能性とでもいうべきものを喚起しているようでもなく心地よい。

* * *

『声、意味ではなく―わたしの翻訳論』のもうひとつの有力な仕掛けは、読者との最初の接点、音楽でいう「アタック」にあたるタイトルのなかに見いだせるように思う。「声、意味ではなく」。なんと意外な、なんと動的な、つまり本文への緩やかな、しかし確実な移行を喚起するアタック。ベートーヴェンの第三交響曲第一楽章冒頭の意外性と第四交響曲第一楽章冒頭の流動性の両方を兼ね備えたような不思議なアタック。和田さんは「声、意味ではなく」という。この言い方は、声を前面に押し出すことによって、意味を排除しているように見えるけれども、当然のことながら実はそうではない。〈翻訳〉が、意味を追いかけながらその実けつして意味に追いつくことのない訳読と呼ばれる、だれもが一度はつなぎとめられたことのある労苦と間違つても混同されることがあつてはならないがゆえに、和田さんはあえてこういう言い方をされるのである。意味は、実は、声を追うことによつてしかつかまらない。ぼくは、今も続く修行の途上で、和田さんも引いておられるジャン・スタロバンスキーの仕事に出会い、それを通して、言葉に耳を傾ける *être à l'écoute des mots* ということがどういうことであるのかを教えられたという気持ちを持つているので、和田さんの、実は意味に向けられた「声、意味ではなく」という言い方にはなんの抵抗もなかった。それどこ

るか、このアタックから、ぼくは、いちはやく、後続する文章において展開されるに違いない、テクストに対する、一見したところ翻訳とは縁遠い作法を想像した。そして、その想像はほとんど裏切られることがなかった。つまり、「わたしの翻訳論」といいながら、実は、この本は通常の意味での翻訳論ではないのである。それがタイトルに仕込まれたもうひとつの仕掛けである。

* * *

ここまで書いて、もう与えられた紙幅が尽きようとしている。ぼくは書評という日本の制度的なジャンルがあまり好きではないのでほとんど読まないし、また書くことも敬遠している。著者が長い時間をかけ、心血を注いで彫琢した言葉の高みと釣り合う言葉を数日、数週間で紡ぐことなど、ぼくにはとうていできるはずがないからだ。しかし、これはぼくだけの問題なのだろうか、とも思う。今回、和田さんの本の魅力に抗しきれずに、みずから書評のようなものを書く段になって、『声、意味ではなく―わたしの翻訳論』について書かれた文章を拾い読みしてみたのだけれど、著者の言葉の伴奏・伴奏としてふさわしいと思われるものはなかなか見つからなかったからだ。みずばらしい言葉を並べることにはかならないということをはくは十分に認識しているのだけれど、この本のなかで試みられている、一見、翻訳とは縁遠いように見えながら実は翻訳の概念それ自体をラジカルに更新するような、〈翻訳〉という新たな〈読み〉、あるいは〈翻訳〉という行為をとおしてはじめて見えてくる新たな

〈読み〉の作法に多少なりとも触れずにこの文章を終えることは、やはりできない。

その作法のなんたるかを簡明に縁取ることは容易ではないのだけれども、その核心にあるものが言語的越境であることは間違いないだろう。単に、リービ英雄、多和田葉子、アーサー・ビナード、プレスブルゲル兄弟といった模範的な言語的越境者たちが考察の対象として取り上げられているからではない。和田さん自身が、古井由吉とダニロ・キシユ、キシシュと山崎佳代子、吉田健一とセルバンテス、内田百閒とピランデッロというふうに「と」を多用され、異なる言語を実践する表現者たちのあいだを自在に往還しているからである。読みながらいくつもの付箋を付けずにはいられなかったこの本のなかから、それがほとんど暴力に近いものであることを承知のうえで、一箇所だけに言及するとすれば、ぼくは「第二変奏」に読まれる、ダニロ・キシユの「馬」の一節の上を文字通り這うように進められる見事な〈読み〉によって、古井由吉の『杓子』の一節が召喚される、クロスリーディングの部分あげたい。和田さん自身が言語的越境を実践する人、つまり〈翻訳〉する人であることがあらためて鮮明に浮かび上がっているということもあるけれども、なによりも、ひとつの言語のなかにさえ実は、つねにすでに、翻訳の現象がはたらいているということが端的に示されているように思われるからだ。

* * *

翻訳という行為がまず同じひとつの言語のなかで始まっていることを示したのは、一九八〇年におこなわれたジャック・デリダの仕事をめぐるコロックで、「翻訳と／あるいは引用」を発表した豊崎光一だった。あまりにもはやく死にさらわれたこの稀有の仏文学者は、また、こうも言っている。「結局、わたしが翻訳者と呼ぶのはひとつの職業というよりは、世界を生き、そして見るひとつの流儀だ。それは根を下ろすことを拒否すること、ふたつのものあいだに意志的にとどまることだ。それは、彼なりの *départ* (出発、識別) である。もし、翻訳者の、そして翻訳という実践の倫理とでもいうべきものがありうるとすれば、わたしにとつて、それは、この拒否、翻訳者がまったく自発的に受け入れるこの宙づり状態のなかにしかない。」〈翻訳〉という行為を「果てしない〈読み〉の反復を不可欠なプロセスとして含意する」ものとしてとらえると同時に、語りの技法における語り手と登場人物の両方からなる複合的アイデンティティの引き受けになぞらえて（「……かもしれない」という終わり方の文が頻出するのは、このことと無関係ではないような気がする）、一種の自由間接話法の駆使とも考える和田さんの立場は、豊崎光一のこの言葉と豊かに共振しているように思われるのだがどうだろうか。

（水林章）